

利10  
2.62  
8止

竹谷

東三条院常盤井相國賢公の仰じしめ竹谷多利房。東三条院へ

光西言言國師石集三下云。醍醐の竹谷の家

の菩提と云や。母の竹の法勝。勅旨と下と云や。母の竹の法勝。勅旨と下と云や。母の竹の法勝。

念仏と云。慶大善根。無上の功德。何れも。我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。

我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。

我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。

我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。

我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。

我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。我々の利益。そのと云や。母の竹の法勝。

言言竹谷の法勝

竹谷

捨身して一切積蓄を捨り位補廬  
 ありとせられし其の志云い又後車の後よ  
 増益なれりて苦難より心亡れはけり  
 言一返みくく廻向せられし其の志云い又  
 捨身して一切積蓄を捨り位補廬  
 ありとせられし其の志云い又後車の後よ  
 増益なれりて苦難より心亡れはけり  
 言一返みくく廻向せられし其の志云い又

然るやうとせられし其の志云い又  
 増益なれりて苦難より心亡れはけり  
 言一返みくく廻向せられし其の志云い又  
 捨身して一切積蓄を捨り位補廬  
 ありとせられし其の志云い又後車の後よ

ハノ

けい...  
 けい...  
 けい...  
 けい...

けい...  
 けい...  
 けい...  
 けい...

有宋入道...  
 後漢列傳...  
 南陽...  
 以歲月...

有宋入道...  
 後漢列傳...  
 南陽...  
 以歲月...

けい...  
 けい...  
 けい...



地頭職之由二箇度被下宣旨之處在京北不説  
申是幕府將幕勳功賞定補之輩烏指難  
急而准改由申之仍逆鱗在故也龜菊と龜お  
らも也後を院より亀菊の前詔と鎌倉の友  
まて傳るるれも義時同心せざるゆへに氣色あり  
く版て美久兵乱たる也美久兵乱記云備前國長  
江倉橋兩庄院中近く石使れたる百伯子勳勤に  
あつりたる也其恩賞の地頭領家を忽諾しめら  
れ亀菊領と令て改し其の院にても改せしが  
うらんで地頭と改易と云ふ由被下るん義時  
の御孫の解状に日本國の總地頭と補せしゆ年  
家追討六ヶ年備前國の地頭人等或は守り  
或は親とせし影はと擗ど加様の勳功不随に分  
ちしたるん物とせせり罪らるん義時が討て改  
易と云ふやうのいはれども不奉用いふ院中安  
るたりやうのいはれども思石定て  
國々兵どもと云ふいはせたり  
信濃前司行長替古く替置替古の字尚書書典よるん  
書あり又後漢書極樂曰今日所象替置古の字あり  
ん字向のらるんやうのいはれども  
樂府古樂府あり新和府あり文選よ承府詩歌  
とのせり又模範白居易集等和府の向也  
一長恨歌也も承府使たり又承府雜録

七曲舞 貞觀七年正月勅名破陣樂曰七曲舞 自承者と吳のてつさる  
氏文集新示府注太宗為秦王破陣武周軍中相  
作秦王破陣和曲及臨征寫會必奏之以昇公破  
銀甲執戟而舞凡三變每變為一陣舞 刺往  
來後更及七曲舞  
十史畧曰唐太宗七年寫武門奏七德注曰秦王  
破陣和曲更名七德舞七德者蓋取秦果戰五保  
大定初安民和衆豐賦之義也 愚明七徳の舞と云  
舞の一石也七奏と云ふんは非なり  
七徳の舞八古竹宣云十二年小詳也  
云書とわり

六ノは

九節判官 義経也  
浦宿者 在三河守範賴於遠別瀬生麒麟由  
生之同号 浦宿者頼朝の弟也文治三年於伊豆  
案依舎見源二位命被討

七徳の冠者 是は七つあつと教ふうり  
冠者ハ冠と云ふなりと云ふ者ハ冠者と云ふも男也  
也慈鎮和尚野上巻一八八より  
一洗退之進字解三巻一五二より  
下邦にて 前司行幸のやういふ人ハ予  
ト云ふやうのわけありあり

け信濃入道と被抄一紙  
けは長八平家物語とつ

くろて生佛くろちといひさる育まう目めよとてつるつるせり。梅山  
門かどのともをとりてゆけり。すなはち。帝判官のつとめをな  
てすのせり。浦冠うらの冠者ものれり。つるつるをなす。や。多く  
のそとをなす。つるつる。武士ぶしあり。弓馬きうまの王おんの生  
仏ぶつよの者ものなり。武士ぶしよ同おなつてつるつる。彼生佛かのぶつり生ま  
れつる。あつと今いま乃な理り智ち法ぽう師しのまはり。学まかひる也

六時礼懺  
晋しんの恵けい遠えん法師ぽうし蓮れん社しゃといひて蓮れん花け漏ろう  
とつて六時むじゆと礼らいせり。六時むじゆ會かいの格かくとて磨まの善ぜん  
導どう生しょう禮らい懺ぜん偈げと撰せん集じふて日じつ夜やの勤きん行ぎやうといひ  
ふゆふ作さく也なりと云い異い説せつつるつる。浄じやう土ど家け乃なり  
六時礼懺  
法ぽう然ぜんの才さい子し侍せう蓮れん安あんと云いなり。後ご抄しょう子し安あん樂らくといひさる。信しん經きやう文ぶん

公こうに

の時とき別べつ時じ會かい法ぽうをなし。六時むじゆ禮らい懺ぜんといて。懺ぜん乃なり  
貴き賤せん群ぐん集じふせり。官くわん女にょ放はうつて出で家けセリ。後ご抄しょうといふ。あつと  
羽う大だい逆ぎやく鱗りんりりて住ぢゆう蓮れん安あんといて罪つみをなす。官くわん人じん秀しゆ傳でん  
作さくて六條むじゆじやうの系けいをなす。斬ざんゆ  
元げん亨きやう初しゆ書しよ才さい九きゆう云い念ねん佛ぶつ持ぢ誦じゆ之を一いち支し也なり。修しゆ多た羅ら中ぢゆう持ぢ  
千せん佛ぶつ々々な此こゝ方はう勤きん林りん院いん焉なり或ある奴なん迦ぢ焉なり其その始はじめ浄じやう土ど出で已し其その  
十じゆ上じやう美み元げん曆りふ文ぶん洽ぢやく之を間ま空くう法師ぽうし建けん傳でん之を宗しゆ遺い流りゆう未まだ  
流りゆう或ある資し干かん卑ひ調てう御ご揚やう根こん控かう流りゆう暢ちやう哀あい感かん入に性じやう喜ぎ文ぶん女にょ女にょ  
樂らく聞ぶん難なん音いん辨べん可か為を愚ぐ化わ之を端たん矣なり然しか流りゆう俗じやく益えき也なり動どう衛ゑい後ご  
戲ぎ文ぶん寫しや真しん之を未ま廣くわう受じゆ不ふ血けつ暢ちやう之を餘じよ曆りふ與よ智ぢ督とく史し倡ちやう妓ぎ提てい提てい  
女にょ唱ちやう扇せん放はう真しん佛ぶつ秘ひ号ごう蕩たう為を鄭てい衛ゑい之を未ま顔げん或ある又また鼓こ琴しん鏡きやう  
太たい秦しん國こく賈け隆りゆう寺じ也なり秦しん氏しのの人にん也なりつるつる。大だい秦しん寺じ  
善ぜん觀くわん房ぼう

法ぽう事じ讚さん鈔しやう兩りゆう卷くわん上じやう下げのを果くわ也なり。善ぜん觀くわん作さく也なり。つるつる。湯たう付ふつるつる。法ぽう  
文ぶん永えい龜き山さん院いん年ねん弊へい  
如に輪りん上じやう人にん

子しのの刀はち古こ文ぶん真しん寶ぼう鎮ぢん耶や為を純じゆん號ごう針しん刀はち為を銘めい准じゆん南なん房ぼうつるつる。つるつる。

本ほん機きももおおりり。つるつる。善ぜん觀くわん

云云後耶新割儀獨之刀  
妙觀元亨釈書云勝尾寺講堂觀音像空觀土

年七月十八日比丘妙觀刻之千臂千目此觀

嚴又加天王像元五尊三十日而成八月十八日妙觀

合掌而化觀音之聖應也仲芳攝州勝尾寺

墓塚跡之妙觀雕像のらくと書つゝの妙觀

勝尾寺の佛工と云ふ又別入の事なりや云々

つりつゝの細工の上手と云ふ竹木とて人形と

作つて大なる壺繩と云りて病の足おやうふ壺

と小壺と云ふと作りもろろつゝなりし其人さき

の折つゝ小刀三四本ありたり

いづく思明 甚の字也

女内裏思明 後醍醐院時皇居ありと云はへり

藤天納言

と云ひ思明 御首の字也ありへひひりり大言

未練思明 鍛錬せぬと未練と云ふと云ひひりり

つね狐あり

千本の釈迦念仏の文永

の比。如猫と人始つてと云

此を云ふおきき刀とつ

つと云妙観刀といふたは

又内裏思明 化物あり

後大細を云ふと云

つりつゝの細工の上手と云ふ竹木とて人形と

作つて大なる壺繩と云りて病の足おやうふ壺

と小壺と云ふと作りもろろつゝなりし其人さき

の折つゝ小刀三四本ありたり

いづく思明 甚の字也

女内裏思明 後醍醐院時皇居ありと云はへり

藤天納言

と云ひ思明 御首の字也ありへひひりり大言

未練思明 鍛錬せぬと未練と云ふと云ひひりり

つね狐あり

はらへてさうのうたをあきさうはらへて  
ゆゑひあけより未練の狐をけ換へたり  
園の別道入道と云ふ  
庖丁と云ふある人のりと云  
皆人お通入道の庖丁と  
かたやと云ふた。と云ふく  
ららふと云ふことなかりひらるるを別道入道と云ふ人か

園別當入道基氏 天福二年十一月十七日上  
状出家法名丹野  
中納言  
庖丁日本 庖丁者れらるる四條家庶流也  
在子養生主篇は庖丁牛と解事と詳なり  
云是より齋刀とも云也此類多し  
まは倫と云ふ近き名と云ふ  
のり車輪と云ふりて倫扁と云ふ  
して変と云ふり故也琴ア輪と云ふ  
其名也京房易と講と云ふ故り  
和琴首も琴也  
たのし思明 鯉也

ららふと云ふことなかりひらるるを別道入道と云ふ人か







の本ころもいひにやうにぬちよそある人信し  
目下人いひにこれの事もよく見えざらんか  
野論語多聞  
又曰言忠信行篤敬  
愚明不妄貴賤  
思のころあじしと思ひ  
付る事ありて人を

目下いひにやうにぬちよそある人信し  
老少もさる人よりよき事をいふ人より  
人よりたりたるに思ひはつたか  
たゞれさる海よはさあにあらざる事  
か  
か  
か

亦  
人也俗  
云々  
一もあつしこのまにいらんか  
またもやうにやうにうらなひ  
世  
あつ  
うら  
ひてもさうしん天後よたらぬ人  
らいかよひにうらなひ  
中のいひにやうにぬちよそある人



子子のくるまふやあんどんに至あつまうりの胸しりぞのくら  
 舟ふねころごらくせんとい入るうとううううううう

大社だいしや神名帳より多社と云出雲國の大社日本記にほんし  
よき素盞鳥に子太己貴と祭と云神祇令は八丹波いたよ出雲と云ふあり  
素盞蓋鳥也と云り又神春明神と云辨  
 志乃某  
 所ところ愚明知行の伊勢物語よあると云と大社をうつしてめてこく  
わり

さとし愚明信太くささひーい  
いさな人愚明いさねあまといさき也  
みりちい 櫻むつ鏡

とうやまるとあるれい秋のはあきのは聖海と人よめを和も人あまのさ  
 うひくいさ路へ出いづつせおつこほふゆらめさるんとそく  
 のそつさふるよ各まおつてゆしく伝つたおろしうらなはあ

くる獅子ししと海いぬぞむさそてうしあさ海よきふあつれい  
 と人ひといさくせんてあるめとあけ獅子ししのさうやう  
 いとめつじ。あつれおあんとあんな海とていうかあま南原なんげん神かみ揚たか  
 のうら海うみ路へとあめとやむ下げこといか各まあやと  
 てて被おは使つかよううとるりなり。於

せつ愚明  
つし愚明  
ゆの  
みい  
い

と人ひと於おゆじうあておとろく物ありぬへさうりうる神かみ  
 皮かわとよひてげ海社の獅子のこそたらさやう家いへてゐる

らひあるよは侍けんらときりりやといふれれいを  
さるる愚明悪の二字とていふる一といふる悪口と二  
字也もももの家の悪の二字とていふる さるるのさるるのさるるのさるる

其の侍りなるき亭せはいひもりりとてさういふてまる  
あらうていふられハ上人の感深くらうにありまるら

柳菴御短冊或鞆冠或又追善の時経卷等と  
そゆり基也柳とりて造也也といふ木数重半の義説たり御短冊とも多て進上の時冷泉  
家は三重といふ也又三条三光院の相傳  
とて重半といふ吉凶の儀あり吉事ハ半と用いふそてさ海とさ海といふ追善の時卷ともゆりハ重と用おと也

るささるやあらあらたてさ海とさ海といふ本のあいひは  
目紙の目りと通でゆひつく祝もそてさ海とさ海といふさるる

ハハハ

三条右大臣鈔兼辨時代の院と関涉ハ三条家系圖或がで  
以公編  
勘解由小路御世尊寺也行辨の子孫後家なり

有天のあらたれき助成中の家は後出の人  
いらりもも望さ海とさ海といふ所ハ横さ海にまる

らし侍りき  
自讃愚明我といふ所也  
ならず愚明と友といふ所也  
ためもあらず小教もといふ所也  
七つあらず  
七ヶ条出といふ所也  
さるるのさるるのさるるのさるる  
馬といふ所也  
自後といふ所也  
自後といふ所也  
人あらずといふ所也  
花といふ所也

らし侍りき  
自讃愚明我といふ所也  
ならず愚明と友といふ所也  
ためもあらず小教もといふ所也  
七つあらず  
七ヶ条出といふ所也  
さるるのさるるのさるるのさるる  
馬といふ所也  
自後といふ所也  
自後といふ所也  
人あらずといふ所也  
花といふ所也

寂藤光院拾芥云法性寺建春院

まうに。元徳院のちよておのれよとくうらーむ

るをきて。今つ夏馬とくまを物うういさうことして

ふくま愚明つまよ羨好そまう詞也  
そまう愚明そめく

有りうらよ。よるをえん。とびるあうそまをひま

て。衆人に出の中じりひ入る。朝のあやまう

次人まの感と

當代當代と。後醍醐院と。光明院と。あまう  
坊春官坊也位よ。そと太子そくおまう。當代いまう坊よあり

方里小路殿里はするま。ままのけい時おんせ  
堀河大納言信也後醍醐ままのけい  
ままのけい時おんせ  
ままのけい時おんせ  
ままのけい時おんせ

八ノを

花山の庶流堀川号と  
故方里路殿の内小休入ままのけいホノ  
用わけて愚明羨好と堀川殿用わけて  
愚明羨好論語揚貨篇

まうしりし。後徳のまま六のまままま  
と。ま今内承うそ。若のあげうまむんまをまむと  
まを内承をうそ。ま今内承をうそ。ま今内承をうそ

も。後徳のまままままをまむと  
ま今内承をうそ。ま今内承をうそ。ま今内承をうそ

ま今内承をうそ。ま今内承をうそ。ま今内承をうそ

ま今内承をうそ。ま今内承をうそ。ま今内承をうそ

ま今内承をうそ。ま今内承をうそ。ま今内承をうそ

ま今内承をうそ。ま今内承をうそ。ま今内承をうそ

ゆひきりりものごとく思ひたるをたのむるれと昔の人の  
さうりのむすも。よく自後志する。後鳥羽院の清  
るよ。神と被と。一そのうちよありりやと。定家はよ  
秋の神のまのたよりをさきさき 勅 古今在原 なるはゆるまてつらね  
棟梁かきこい

結の神のまの被りたすれやよわくまきし神とあんと  
ゆまの何ゆりさうあふぬへきと。しとれするゆりあ。時よあ  
うてなると覚悟とたの冥加と。ま運するあやと

八の

とくくくある一なるれゆり。九條お國伊通公の歎け  
歎け 禁中(官位)とのとみ或(新)講とし上り時  
の状くこぞうとむくをんとくゆりとも也

とも。うまのせて。自後志するまてつらね

御在光院 相國寺之末寺 舊跡 東山よわり  
在兼卿 御参 識三位 菅原家也 唐橋の祖在良  
草也 下書也 詠草 文章 草のよ  
行房 御寺 寺行 威マドリ 十代の孫 経尹 其の行尹  
の才也  
いっく 野模範  
あ草 恩明 つれ 下志  
及せり 恩明 意好 せり

とも。よまのりの入道 彼事とれとく 尼を侍り。お花  
のみに夕とまはれ。あ百思よとてゆりあるあり 陽





船葉陀寺

道眼道眼皆上より思明六波羅の

八八災八災憂憂喜喜移移尋尋僻僻轉轉息息是是と八八災八災と云云をを如如常常流流ちちててをを眼眼ひひすす

法法授授一一わわりり 斯斯化化師師とと六六德德化化とと云云才才子子とと六六斯斯化化とと云云也

決決着着一一にに八八災八災とと云云とと云云也

志志ををてて推推りりおお思思ええ流流ととひひとと亦亦化化みみををおおややししとと云云也

一一よよづづりりののううりりよよりりををれれくくももととひひ出出ししれれははとと云云也

一一くく憂憂一一ののりりとと云云也

賢賢助助僧僧三三密密也也野野家家のの也也  
加加持持香香水水 正月正月八八日日よりより十十日日のの朝朝までまでのの法法事事なりなりとと云云也

後後七七日日とと云云也也乃乃小小三三度度のの加加持持なりなり加加とと六六佛佛のの三三密密なりなりとと云云也

持持とと八八行行者者のの三三業業也也彼彼三三密密とと此此三三業業持持とと加加持持賢賢助助僧僧正正とと云云也

法法師師とと云云也 外外陳陳とと云云也 思思明明賢賢助助僧僧正正のの内内のの法法師師とと云云也

小小のの思思明明とと云云也 思思明明賢賢助助僧僧正正のの内内のの法法師師とと云云也

大大にに多多くくとと云云也

思思明明とと云云也

思思明明とと云云也

思思明明とと云云也

思思明明とと云云也

思思明明とと云云也

思思明明とと云云也

思思明明とと云云也

思思明明とと云云也

思思明明とと云云也

思思明明とと云云也

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

思思明明

八ノ一

よるうきこい。あひひるらも。うろけりあれ。びんあ

ひんあと愚明下りわとひんあと愚明こころわらわらあえとあひひくすりのさよ。於

てあひひくと愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他と

と愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他と

と愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他と

と愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他と

と愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他と

と愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他と

と愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他とあひひくと愚明そのを多て他と

愚明侍女と云りて人としつらん

八月十五日八月廿八日宿也。宿は明らぬ月と

の各の時音考とありて二十八宿と云ひはさ

注星音音風亦音考の尻と云ふは宿とも秀も

西義也のと云ふは宿の消明の義未考

東方七星船尾宿尾宿尾宿尾宿尾宿尾宿尾宿

星野野野野野野野野野野野野野野野野野野

正月一日り十二月晦日して廿八宿と一星つ毎日

あててこの宿ともは代りて二十八宿と云ひはさ

相傳也として別一前後もドワつてわりの中比大内

四宿も日特宿なりとて牛と除て廿七宿とせり

八月廿八日九月十日九月十二日九月十四日九月十六日九月十八日九月二十日九月二十二日九月二十四日九月二十六日九月二十八日九月三十日

婁宿之に宿法あり

あよ月と夜よ良夜を以

信友浦 奥列は信友郡あり新古今抄にてあり  
き物久々のよその穴浦の愛ひくくく山登  
の詞はあよとをいけりあり

あよ月と夜よ良夜を以

不ぞ 鈔不按 承依類聚あり  
今穴山 鈔山城の名余之暗峠山と云古今の梅家  
句すまはるる山やふゆのまろくそまき

あよ月と夜よ良夜を以

秋務のまわりの時けふふ山おりのあそそとあり  
けり 辨馬山六別よま

あよ月と夜よ良夜を以

りり人 愚明 守人  
やしく 愚明 守人 ともあり  
くくか 鈔 先才

あよ月と夜よ良夜を以

世のありき 鈔 是より別後よまありなりあり  
はげなれ 鈔 不礼全  
あつま 鈔 田舎人

あよ月と夜よ良夜を以

の終りてさそふありあり人と思ふ文を  
康秀が三河のそりに於てわづまはをいへて

あよ月と夜よ良夜を以

ハノレ

マシツハハア ときつ返すよよりりとあり  
樂天の琵琶行は長秋 偈 舞のり 琵琶とひき  
てせよりて ちやふら 年ふては 舞とあり  
舞人の婦とありありあり

あよ月と夜よ良夜を以

あつらふ女のおけりた老法師のあやれあり

あつらふ女のおけりた老法師のあやれあり

あつらふ女のおけりた老法師のあやれあり

あつらふ女のおけりた老法師のあやれあり

あつらふ女のおけりた老法師のあやれあり

あつらふ女のおけりた老法師のあやれあり

此をうへし山  
 御苑山名  
 かりいへはさつううううりなり

かろうきよひのきくもあ

ひささうりへうづるさるんまのぼろくもあめすく  
 とよまのふふとりりるひさうんごそふつきる  
 さるお月ううへうれ女なうんよつけともふらうり  
 足あつて年もひけるん男かかあやまき方のうめよあ  

 わるかと野惜の字とあつてもいふとさう  
 是より小辰とまててさういふ
 
 けうと誠のうううよあさん  
 やりと人もおひささうれはうきひひひおうんも  
 歌ううううおほくうんいといふあいつらめ梅の

八ノ三

梅のたうりき  
 梅のたうりき  
 梅のたうりき  
 梅のたうりき

伊勢の池  
 大和の池  
 豊後  
 豊前

花ううううきま  
 花ううううきま  
 花ううううきま  
 花ううううきま

乃中よささうりうううめむんうあやあん  
 乃中よささうりうううめむんうあやあん  
 乃中よささうりうううめむんうあやあん  
 乃中よささうりうううめむんうあやあん

うと信よりひききて死すてよ由一それたの  
と病あるの死やおしむる終の常位平生の念  
にありひく生の中多くはるをりて故あつよ  
道を修せんと思ふ程よ病とうけく死門は辱む時  
死するも世にひかりて年月乃極急を悔  
てげひも一ちるをりて命とまゝくせん衆と  
目よばるてける彼のおこらむをてんと終  
ういをおこらむややとておのよめまはるよあは  
ハノコ

死してこそぬびてひのこころあめこのこと  
まゝ人といふれぬとて下。死をぬて故とま  
ありてなよむりんとせむ。死はくへく如幻の生の  
如幻の生 金剛經の如夢泡影  
無常無業無師曰莫有相とありと夢中同中に何のりともあらん。まゝ人  
答ふ論せりしあり  
と死は皆妄執あり。死はよらううの妄念迷執と  
ありて一事とてあつては。死は万事を放すて  
放下 禪語 放下 着つてあつてはつては  
放下 禪語 放下 着つてあつてはつては  
道にむく時さりりなく。あ  
化きて心身なりく志つたあり

違頂持頂也  
 動靜寒温自愧自悔

三四十二

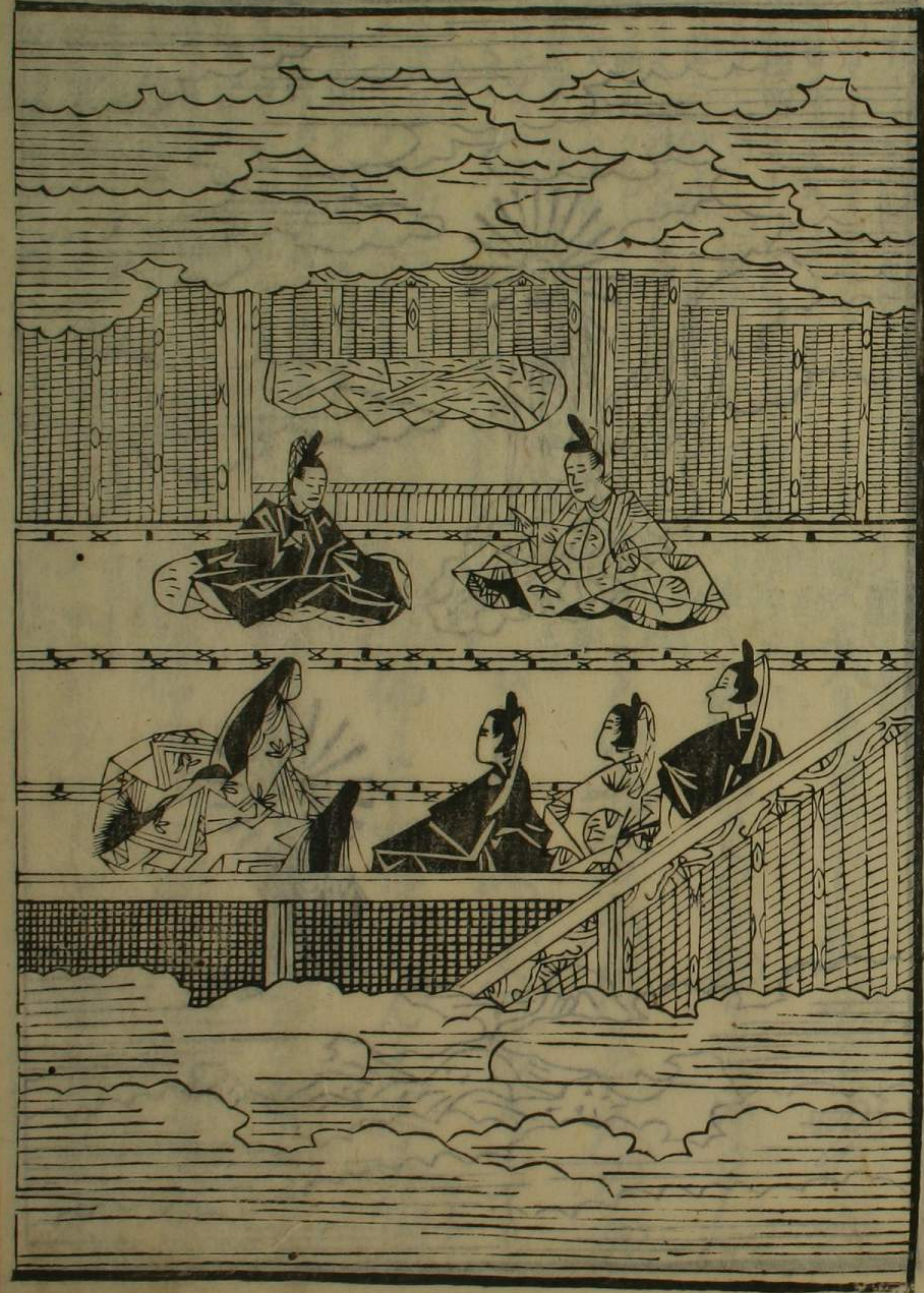
ろくろひひくろ苦樂のうめあり樂といひこのと  
 あひまろよごそれともむるもやむ時なり樂歎  
 まろとまろづまのなぐあま二粒あり糸糸と才藝

三一八鮮欲三小味野  
 礼記言飲食男女人之大欲也

とあかまのれちり二まの色

欲三まの味るちまろ乃種うひはまにまろの顔  
 のあまおとりてまろまろ乃まろひあまのあ  
 まろまろまろ

八八





八ね

本まかり一年恩明を好く入ふまかり一年之野切  
しりこりき者今古とくまかりきりやうを代八歳の官八まかり一年又まわりて云。  
の詩哥などもまかりまかりしりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
臣又頼面のまかりまかりまかり何ぞん春顧難故れ  
庭りまかりまかりまかり三礼を諸りまかり  
對禪の願と献り冠華の詩と吟  
王元之の蜘蛛の句とつる糸影庭堅八八八八  
詩と賦とつる先まかりまかりまかりまかりまかりまかりまかり  
最妙まかり法死経八歳の龍女佛まかりまかり南  
方無垢の成道と唱まかり記前まかりまかりまかり  
佛まかり物まかりまかり釈氏要覽中曰佛と  
法と先後  
報恩経曰佛以法为师佛従法生法是佛母佛依法住  
於三有中何不以法为师初佛言法雖是佛母而非佛不  
以所謂道由是故佛先法後也見釈氏要覽中矣  
自宗安然法師起始起有信是無而勿忘有者也有禪  
人先來自采穀法中経處虫生彼有疑於此耳彼豈能  
知云化形化之理哉  
太蔵一見云釈迦譜云却初天地大水彌滿凡吹南嶽  
次第結法化为天宮乃至山巖昇陞成河深壑成海後  
垂下俱建立光音天乃下未至身光飛折自在  
地味香中因食被故体重光滅彼飛不起日月始生  
乃分書及因身食故地味遂滅後生遂羅婆羅戒發

後生種米長守半朝割暮生因食米故方分男形女相  
 後貧積聚割不後生後相侵盜無能次者讓之智者  
 三摩多為本等王實善善罰惡衆共給之  
 起世因本姓是王等王子孫相承三十三世善惡王後乃證  
 轉輪聖王之位王四天下直至師子頰王凡一百卅五乃  
 十六主師子頰生四子一名淨飯一名白飯三解飯四名  
 丹露飯淨飯王生二子一名悉達多一名難陀白飯二  
 子一名帝波一名難提迦解飯二子一名阿尼婁駄一名若  
 跋提梨迦甘露飯二子一名向難陀一名提婆達多其  
 悉達多一名子名羅睺羅  
 佛說又因緣之趣云云云云云云云云云云云云云云云云  
 皇云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云  
 十年云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云  
 人物生初の初と末と  
 程子遺書十八云或問太古之時人還與物同生否問  
 莫是純氣為大級氣為否曰然人乃五行之秀氣  
 此是天地清明純粹氣所至也或曰人初生時遠必化  
 不自此必地埋高徐論之且如海上勿露出沙鳴便有  
 草木生有之而生草木不足惟既有草木自然禽獸生  
 鳥或曰先生語錄中云鳥知海鳴上無氣化之人如何曰  
 是近人地固無須是極遠地有不可知曰今天下未有  
 無父母之人古有氣化今無氣化何也曰有兩般有氣是  
 氣化而生者若腐草化鳥是地既氣化則合化  
 時自化其氣化生之後而種生有且如身上著新衣

八ノ五

服應記曰便有曉風生其間此氣化也氣既化後更不  
 化便以種生此理甚明  
 礼記問喪篇云礼義之經非從地降也非從地出也  
 人情而已矣

たつたつと。徳人ありあり  
 て無き

佛說三身壽量無邊經曰文殊白佛言我等後有聞如  
 未說法如未何佛聞此說法佛生文殊言過四十一  
 重內大院大美盧遮那說法文殊重自佛言四十一  
 重內大院何者是耶世尊後言過十住十行十廻向  
 十地等覺內大院美妙覺地大思盧遮那說法文  
 殊重自佛言妙覺地思盧遮那從何佛美說法世  
 尊後言妙覺地思盧遮那美無始無終一心念本佛說  
 法文殊重自佛言無始無終一心念本佛美何佛說法尊  
 後言無始無終一心念本佛美無念本佛說法文殊重  
 曰佛言無念無念本佛美何佛說法尊後言無念無念  
 本佛上更無佛陀無前佛無後佛無心念本佛以不思  
 議為体無去來無三身性無十界性云云今及不記

萬治元戊年  
 極月中旬  
 大和国九左衛門板行



大德四年正月經已終

經已終

Handwritten text in a rectangular frame, including a date and a signature.

Handwritten signature or name in cursive script.

Small rectangular stamp or seal.

